

平成艸紙



おりおりの記

## 「終活」の時を迎えて

一般財団法人 国際開発センター  
会長

品川 正治

私は大正十三年（一九二四年）生まれで、この七月に満八十八才を迎えました。十三年前一人息子を亡くしましたが、嫁はその八年前にすでに癌で亡くなっていましたので、息子がひとりで育てて来た孫娘を私の子供として親代りを務めて来ました。

息子は大学で政治史を教えていましたが、娘を自分の手で育てる決心のもとに、新たに教育学を学び、放送大学では教育学を担当していました。その息子が遺したもののうち、どうしても頭を下げたくなるものが二つあります。

その一つは、娘の誕生日毎に一冊ずつ渡して欲しいと言って渡された十冊のノートです。死期を覚って病院のベッドの中でせせせと書いていたのが今でも目に浮かびます。教訓じみたことは一切なく、例えば、「十五才の誕生日おめでとう。今年はそろそろお祖母ちゃんの家を手伝いなさい。炊事は、掃除は、洗濯は……」と詳しく手順を記しています。十八才の分は、「戦争の話をお祖父ちゃん（即ち私）から詳しく教えてもらいなさい」、二十二才の冒頭は「失恋しましたね。実は僕も経験があるのです……」といった風です。娘は読み終ると自分のノートに全部書き写して、私に渡してくれるのです。

二つ目は、これも死期を覚って、病を押して娘を沖縄につれて行き、沖縄戦の戦跡を一緒に歩いて、

ついに娘は「日本の聖地」は沖縄だと思ふようになったことです。娘に「聖地」を与えたのです。彼女は連休となれば、しばしば、いまでも沖縄に行っています。



遺された孫娘を吾が子として育てて来たので、小学校、中学校の授業参観などで、若いお母さんたちと話したり、宿題を手伝ったりして結構私を若返らせてくれました。

しかし、娘も二十五才、大学を卒業し、就職も厳しい職場ですが相應にこなしており、さらに彼氏も決まりました。

「就活」と「婚活」をすませたのです。さすがに家を出る日は寂しい思いで涙を見せましたが、私はぐっと忖えて……さあ今度はお祖父ちゃんの「老活」だ。残された日々を精一杯生きてみせるよ。毎日記に向って、戦後の歩みでも書きつづけるよと告げ、いまのところ、言葉どおりの日々を送っています。

正に「終活」の時を迎えての私の姿です。